

エミリ・ディキンソンの詩における〈死〉のイメージ

— 280番の詩の解釈を中心に —

後 中 陽 子

〔抄 録〕

エミリ・ディキンソンの詩において、〈死〉は重要なテーマの一つであり、〈死〉を扱った彼女の作品は多い。しかし、同じく〈死〉を扱った作品であっても、死ぬことで魂としての存在は天国へ向かっていくイメージの詩もあれば、また一方で、人が死んで棺桶あるいは墓の中から外の世界や死者の意識を描くといったイメージの詩もある。本稿では、対比的なこの二種のイメージに注目し、そのうち特に後者について考察する。まず280番をとりあげ、その解釈と〈死〉のイメージを捉え、ディキンソンにとって〈死〉は〈永遠〉への一歩であることを考える。

キーワード 〈死〉、意識、地中、〈時〉、〈永遠〉

I. 序 論

エミリ・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86) は、アメリカ・マサチューセッツ州 (Massachusetts) 西部のアマースト (Amherst) の片田舎を生涯離れることなく、孤高な一生を送った。彼女は、地理的・空間的には限られた狭い行動範囲の中で生きたが、逆に豊かな想像力と鋭い観察眼によって広大な精神世界を生み出した。彼女の詩は、言葉を削ぎ落とした短い4行詩を特徴とし、聖書のアリュージョンに満ち、さまざまな花や宝石の名前・色などによる効果的な象徴を孕み、きわめて多義的である。⁽¹⁾ ディキンソンの詩は〈自然〉〈愛〉〈死〉〈永遠〉〈詩人・芸術〉〈信仰〉などがおもなテーマとなっている。本稿では、その中でも〈死〉のテーマに注目する。なお、テキストはT. H. ジョンソン (Thomas H. Johnson) 版を用いるため、詩の番号もそれに従う。

‘Time’、‘Pain’、‘Sea’、‘Sun’、‘Death’、‘Immortality’、‘Eternity’などの言葉は、ディキンソンのキーワードとして捉えることができる。とりわけ ‘Death’、‘Immortality’、‘Eternity’は彼女の〈死〉についての思想を考えるのに重要な単語である。彼女の〈死〉を扱った作品は多く、たとえば465番のように、〈死〉の瞬間を冷静に観察している作品もあり、また153番や390番のように、〈死〉というものを擬人化した作品もある。このようにディキンソンの詩の中にはさまざまな〈死〉が描かれ、彼女にとって〈死〉のテーマがいかに重要であったかが窺い知れる。

とりわけ、同じく〈死〉を扱った作品であっても、一方で、死ぬことで魂としての存在は天国へ向かっていくイメージの詩もあれば、他方、人が死んで棺桶あるいは墓の中から外の世界や死者の意識を描くといったイメージの詩もあり、ディキンソンの詩における〈死〉のイメージは、概してこのような対比的な二種のイメージに分けられると論者は考える。本稿では、後者のイメージについて考え、さらに詩人の〈死〉と〈永遠〉についての思想にも触れたい。

前者の、死ぬことで魂としての存在となり天国へ向かっていくというイメージ、そして神の国で永遠に生きるという考え方は、キリスト教社会の伝統的な〈死〉に対する観念として受けとることができる。しかし、自分の死ぬ瞬間や、墓の中から死者の意識を描くというのは、ディキンソン独特の機知に富んだ〈死〉の捉え方であるといえるだろう。

まずは後者に分類されるであろう280番「私は頭の中に葬式を感じた」(I felt a Funeral, in my Brain) の詩を中心にとりあげ解釈を試み、次に712番「私が死のために止まることができなかったので——」(Because I could not stop for Death—) にも触れて、ディキンソンにとっての〈死〉と〈永遠〉の関係を考察する。

Ⅱ. 280番の詩における二つの解釈

ディキンソンの詩が、晦渋で多義的であり、知的なほのめかしに富んでいるのを特徴とすることは、誰もが認めるところである。したがって、一つの詩に幾通りかの解釈がなされ得るのも当然のことである。

280番が書かれたと推定されるのは、1861年ディキンソン31歳の頃である。

モーデカイ・マーカス (Mordecai Marcus) 氏はこの詩について、著書*Cliffs notes™ Emily Dickinson: Selected Poems*の中で、「たいていの批評家たちは“I felt a Funeral, in my Brain”(280) は死についてのものであると考えているけれども、私たちはそれを“After great pain”で描かれているような精神の崩壊と最後の防御的無感覚への沈降へと導く心的苦痛の劇化として見る」⁽²⁾ との立場を示している。また、ロバート・L・レア (Robert L. Lair) 氏も1860年代初頭のディキンソンの状況を示した上で、「この叙情詩は……(略)……詩人が経験した精神の崩壊に近いものを、心理的な象徴において劇的に表現している」⁽³⁾ との見解をとっている。

280番を、死についての詩と捉えるか、あるいは詩人の精神的なものの埋葬として捉えるか、意見の異なるところである。論者はこの詩を一読したとき、ディキンソンが自分の死を客観的に冷静に眺め、また感覚的に描写している機知のすばらしさに脱帽した。論者は死についての詩であるという見方に賛同している。しかし、再読するうち、この詩の第4連・第5連に進むにつれ、‘I’「私」が‘dropped down, and down—」⁽⁴⁾「下へ、下へと落ちた——」というところに多少のひっかかりを覚えた。それは、‘I’とはどういう存在としての「私」なのかという疑問である。つまり、棺桶の‘Box’の中に入れられている肉体の「私」なのか、肉体の生命

と関わるものである ‘Soul’ 「魂」としての「私」なのか、あるいは意識や思考を司る ‘Reason’ 「理性」といった精神的なものとしての「私」なのか、さまざまな解釈の余地があるということである。このことから、生命の葬儀ではなく「心的苦痛」の埋葬との見方にも首肯せざるを得なくなった。

以下、死についての詩であるとする前者の立場からの解釈を主として、心理的象徴としての埋葬であるとする後者の解釈を補足する形で、二つの見方から280番の詩を考察していく。

1. 死についての詩としての一解釈

T. H. ジョンスン (Thomas H. Johnson) は、280番の詩についての評価を、次のように述べている。

The superb poem “I felt a funeral in my brain” fulfills its intent of evoking the characteristic mood of New England funerals and their appalling effect upon a person both sensitive, and acutely allergic, to them. ⁽⁵⁾

すばらしい詩「私は頭の中で葬式を感じた」は、ニューイングランドの葬式の特徴的な雰囲気と、それらに対して感受性が強くまたひどく神経過敏でもある人をぞっとさせる効果を呼び起こすという詩の意図を果している。

まず本節では、この詩がジョンスンがいうように、「ニューイングランドの葬式の特徴的な雰囲気」を伝えている、生命の葬儀である死を描いた詩であるという見地から、この詩を考察していく。第1連を引用する。

I felt a Funeral, in my Brain,
And Mourners to and fro
Kept treading – treading – till it seemed
That Sense was breaking through – ⁽⁶⁾

私は私の頭の中で、葬式を感じた、
そして会葬者たちは行ったり来たり
歩きつづけ——歩きつづける——まるで
感覚が壊れてしまうまで——

1行目に ‘I felt a Funeral, in my Brain,’ 「私は私の頭の中で、葬式を感じた」とあるように、詩人の頭の中で詩人自身の葬儀が執り行われる。死者である詩人は、それを客観的に、冷静に

描写している。死の悲しみや恐怖に詩人の知性が呑み込まれることはない。詩人の関心はもっぱら、死者から見た周りの生者たちの様子と、喪失していく自身の感覚と理性の行方に向けられているようである。‘Brain’は「脳」から「頭脳」「知力」へと意味が拡大した言葉で、知的なものを感じる部分である。

OEDによる‘brain’の定義は次のようである。

brain: *fig.* Intellectual power, intellect, sense, thought, imagination. (From 16th c. often plural.)

このように、象徴的に知性の力や感覚、思考、想像力を表わすものとして‘Brain’を捉えることができる。コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772–1834) が近代批評文学の先駆といわれる『文学評伝』(*Biographia Literaria*, 1817) の中で、空想 (fancy) と想像力 (imagination) を区別し、詩人は想像力に訴えて空想に訴えるべきではないと論じている⁽⁷⁾ように、ディキンソンはただの空想 (fancy) の遊びではなく、知性の力 (brain) によって、または想像力 (imagination) によって、まだ自分が生きているうちから自分の葬儀を見ているのである。

第1連2行目 ‘And Mourners to and fro’ 「そして会葬者たちは行ったり来たり」には聖書のアリュージョンが見られる。旧約聖書『コヘレトの言葉』12章5節には ‘and the mourners go about the streets.’⁽⁸⁾ 「そして泣き手は町を巡る」との一節があり、注意深く同じ表現を避けているが、ディキンソンはこの ‘mourners’ を意識している。

葬儀のために教会に集まってくる「会葬者たち」‘Mourners’の足取りは、第1連3行目の ‘treading–treading–’の繰り返し表現しているように、単調な足取りであり、次の第2連において ‘like a Drum–’⁽⁹⁾ 「太鼓のように——」と形容される追悼儀式的 ‘beating–beating–’⁽¹⁰⁾の調子と相まって、単調に整えられたリズムにより、儀式の雰囲気をもごとに醸し出している。

第2連では会葬者たちがみな教会の席につき、葬儀が進んでいること、それを聞く「私」の心が「麻痺してしまった」と思われる様子であることが描かれる。

第1連・第2連、ともに4行目で注意が向けられるのは感覚の崩壊と心の麻痺である。死者となり肉体とのつながりを失った詩人の知覚は、もはや ‘Sense’ 「感覚」や ‘Mind’ 「心」など精神的・思考的なもののみとなっていく。

第1連と第2連で、会葬者が集まり、教会での葬礼が終わった。次に第3連を引用する。

And then I heard them lift a Box
And creak across my Soul
With those same Boots of Lead, again,
Then Space – began to toll,⁽¹¹⁾

そしてそれから私は聞いた、彼らが棺桶を持ち上げて
あれらの同じ鉛のブーツを履いた人たちが、ふたたび、
私の魂をきしりつつ横切るのを
すると空間が——鐘を鳴らし始めた、

第3連はいよいよ出棺のときである。会葬者たちがみなで棺桶の箱を担ぎ上げる。第3連2・3行目、「私」はその様子を「[I heard them...] creak across my Soul / With those same Boots of Lead, again,」「あれらの同じ鉛のブーツを履いた人たちが、ふたたび、／私の魂をきしりつつ横切る」と感じとっている。

ここで論者には二つの幻影 (illusion) が重なっているように受けとれる。すなわち、一つは、これを出棺の様子を呈しているとするならば、‘creak’「キーキーきしんで」いるのは棺桶であり、‘those same Boots of Lead’「あれらの同じ鉛のブーツ」は重々しい単調な足取りで、黙々と棺を運ぶ会葬者たちの足元にカメラアングルが向けられているのだといえるだろう。そしてもう一つの幻影についてであるが、それは次節の2でくわしく述べることにする。

第3連4行目で弔いの鐘が鳴り始めた。第4連では、棺桶の中の詩人が野辺の送りを感じとる。第4連1・2行目では、‘As all the Heavens were a Bell / And Being, but an Ear,’⁽¹²⁾「天はまるですべて鐘であったかのように、／そしてまだ生きているのは、耳だけだ」と詩人が歌うように、天すべてが鐘であるかの如く感じられるほど、空間全体が鐘の音に支配される。鐘が鳴り響く中を、野辺送りの葬列が続く。ただ静かに、弔いの鐘以外に聞こえるものはない。生の世界である外界と「私」とのつながりは、‘Being, but an Ear,’ただ耳だけの存在へと縮約されていく。棺の中の「私」は‘Silence’「沈黙」をただ一人の連れ合いとして、‘Wrecked, solitary,’「淋しく、破滅していった」。第4連の3行目から4行目にかけて、‘Silence’、‘some’、‘strange’、‘Race’、‘solitary’など[s]音が連続し、ひそやかな孤独を効果的に音で表現しているといえる。

最後の第5連の解釈に移る。

And then a Plank in Reason, broke,
And I dropped down, and down –
And hit a World, at every plunge,
And Finished knowing – then –⁽¹³⁾

そしてそれから理性の一枚の板が、壊れた、
そして私は下へ、下へと落ちた——
そして揺れるたびに、世界に当たって、

そして意識が途切れた——それから——

とうとう最終連で意識の崩壊が始まっていく。第5連からは意識が失われていく具体的なイメージが描かれる。第5連1行目に、‘And then a Plank in Reason, broke,’「そしてそれから理性の一枚の板が、壊れた」とあるように、支えとなる頼みの「理性の板」が壊れて、詩人の意識は落下していく。

ここで、最初に提起した問題について考えたい。第5連2行目の‘And I dropped down, and down—’で「下へ、下へと落ちた——」のは、どういう存在としての「私」であるかという問題である。

一つ目の可能性として、落ちていったのは棺桶の‘Box’の中に入れられている肉体としての「私」だとする。そうすると、第5連3行目の‘And hit a World, at every plunge,’「そして揺れるたびに、世界に当たる」のは墓穴の中に棺桶が下ろされるという描写であり、ゆっくりと下ろされながら棺桶が地面にぶつかる様子を表現しているのだということになる。

第二の可能性として、‘Soul’「魂」としての「私」だとしてみる。‘soul’は、旧約聖書の『創世記』2章7節に、神が「命の息」(the breath of life)を吹き入れ給い、「人は生きる者となった」(man become a living soul.)⁽¹⁴⁾との記述があるように、肉体の生命と関わるものである。しかし、280番の詩には魂と肉体の相克は見られないことや、たとえば524番・947番のように魂が肉体と離れて天に昇るイメージを描いた詩も見られることなどから、魂が地中に落ちていくイメージであるとするのは不自然だといえる。

最後に第三の可能性として、意識や思考を司る‘Reason’「理性」といった精神的なものとしての「私」だとする解釈については、次節で述べる。

2. 心理的象徴としての一解釈

次に、一連の葬儀の描写を、実際の死ではなく意識の埋葬、心理的・精神的なものを葬ることを埋葬という形で象徴しているのだという見地から280番の詩を論じていく。

まず、この詩が書かれたディキンソン31歳の頃の背景についてであるが、前述のロバート・L・レア氏は、チャールズ・ワズワース (Charles Wadsworth) 牧師がディキンソンを突然来訪したことと、カルヴァリ教会への赴任でフィラデルフィアを去るという出来事が1861年の前後にあったことを指摘して、「詩人はそれらの1・2年の間、表現しがたいような精神の苦痛を経験した」⁽¹⁵⁾としている。また、新倉俊一氏はディキンソンの年譜を編集する中で、ディキンソンが愛読していた女流詩人ブラウニング夫人エリザベス・バレット (Elizabeth Barrett, 1806-61) が1861年に死去したことを記すとともに、280番のような「内面的な危機を示す作品が多い」⁽¹⁶⁾ことを指摘し、ディキンソンの手紙の一節を引いている。手紙は原文から引用する。彼女の手紙の告白は次のようである。

I had a terror – since September – I could tell to none – and so I sing, as the Boy does by
the Burying Ground – because I am afraid – ⁽¹⁷⁾

苦しみの真相は明らかでないにせよ、彼女が感情的ストレスを抱えていたことは事実である。また、その数年前の1858年、28歳の頃から彼女は自作の詩の清書を始め、受取人不明の恋文とおぼしき「マスター・レター」の1通目を書いている。この「マスター・レター」について、新倉俊一氏は次のように説明する。

……留意しておきたいのは、これらは署名もない草稿であって、実際に送られた手紙ではないことである。いくらか推敲された跡はあるけれども、ディキンソンの心情の乱れがそのまま表われていて、ほとんど日記の走り書に近い。⁽¹⁸⁾

‘Master’ ⁽¹⁹⁾ と謎の相手に呼びかける一連の手紙「マスター・レター」の宛先についてはさまざまな憶測がなされ、相手を兄・オースティン (Austin) の友人であるサミュエル・ボウルズ (Samuel Bowles) とする説もあるが、依然としてディキンソンの心の内は謎に包まれたままである。⁽²⁰⁾ この謎の手紙を書き始めたという内面の変化の表われから、何か精神的に大きな出来事がディキンソンの胸を締めつけていたことは確かなようである。

さて、そのことを念頭に置いて詩の解釈に戻る。

第1連・第2連までは、意識の埋葬を葬儀の様子になぞらえているにしても、葬儀のイメージを描いているものとして、前節の1で論じた解釈と同じで問題はないだろう。

問題は第3連からである。前節で論者は第3連2・3行目 ‘creak across my Soul / With those same Boots of Lead, again,’ には二つの幻影が重なっているようだと言ったが、もう一つの解釈をここで記す。「キーキーきしんで」いるのは棺桶であるほかに何であるか、「あれらの同じ鉛のブーツ」は会葬者の足取りのほかに何を象徴し得るかを考える。

それは、きしんでいるのは ‘my Soul’ 「私の魂」であり、‘Boots of Lead’ 「鉛のブーツ」は私の魂をよぎるものだとする見方である。苦しみに囚われ「私の魂」は ‘creak’ 「うまく機能しない」で悲鳴をあげている。「鉛のブーツ」のように重く、人には言えない苦しい思いが絶え間なく「私の魂」を踏みつけ続けるのだと、詩人は詩に託して訴えているのかもしれない。具体的な棺桶とブーツの映像と、抽象的な魂の苦しみを重ねている詩人の表現の巧みに敬意を表わしたい。

中島完氏は、ディキンソンの詩について「彼女の比喩の多くは抽象と具象を結びつけ形而上的イメージを与える点で特徴的」⁽²¹⁾ であると述べているが、280番の詩もその一例であるといえるだろう。

最後に、先ほど提示した第5連の問題について考える。

第5連2行目の‘And I dropped down, and down—’で「下へ、下へと落ちた——」のは‘Reason’「理性」といった精神的な存在としての「私」だという第三の可能性である。

酒本雅之氏はまさにその立場で、「『頭の中』の葬儀が『頭 (Brain)』、あるいは『理性 (Reason)』を埋葬しようとしていることは論証するまでもない」⁽²²⁾と主張している。

前述したディキンソンの当時の苦しい内面を鑑みれば、知的な想像力と感受性をもつ彼女が、自らの意識が沈降する苦悩の心理を実際の葬儀の様子に仮託して表現したものとして、この詩を捉えることは妥当である。

各行の頭の‘And’の連続が、意識がなくなるところに向かって進行していく様子をリアルに描き出し、4行目最後の一語‘—then—’がプツリと切れた意識の途切れを表わしている詩人の手腕はみごとである。

このように、280番「私は頭の中に葬式を感じた」は、詩人の卓越した想像力が未来の自分の葬儀を描き出したものであるとする見方と、葬儀の描写になぞらえて、自身の意識や心的苦痛といった抽象的な観念を埋葬という形で具象化したものとする見方、両方の解釈が可能である。さまざまな方向からの解釈を可能とする深みある詩を書き、節約された言葉に無限の可能性を生み出すところに、女流詩人エミリー・ディキンソンの偉大さがあるのだといえるだろう。

Ⅲ. 280番の詩における〈死〉のイメージ

以上、280番の詩について二つの解釈をしてきたが、論者は前者の解釈の立場から、ここに読みとれるディキンソンの〈死〉のイメージについて考えたい。

序論で述べたように、280番における〈死〉のイメージは、死んで棺桶から外の世界や死者の意識を描くといったものであった。死して彼女は天の国に迎え入れられるのではなく、「下へ、下へと落ちた——」のである。ここにおいて彼女の意識は、天上にはなく地中にある。このあと死者である詩人がどうなったかについては、‘—then—’の一言とハイフンが、死者が天に引き上げられることなく墓中にあって、意識としての存在すら無となったことを暗示しているかのようなのである。〈死〉を意識の消滅と捉えているのだとすれば、これはディキンソンが〈死〉に対して客観的な見方をしている詩であるといえるだろう。

しかしまた、別の見方をすれば、‘—then—’「——それから——」とあることから、その先に何かがあることを、詩人はあえて語らず省略することで詩に無限な広がりをもたせているとも受けとれる。‘—then—’以後の意識の途切れは、沈降していく死者の意識が、感覚では言い表わせない世界へ、〈時〉からも脱却した別の世界へ移ったことを暗示しているとも考えられる。

次に、詩人がやはり〈死〉の世界の住人となり、さらに〈永遠〉をつかもうと待ち続けている詩をとりあげる。地中にある死者という点で280番と同種に分類できるであろう712番について、簡単にではあるが解釈を試み、ディキンソンの〈死〉と〈永遠〉の思想を垣間見たい。

Ⅳ. 712番の詩における一解釈と〈死〉のイメージ

712番「私が死のために止まることができなかったので——」(Because I could not stop for Death-) は、ディキンソンの詩の中でもとりわけ完成度の高い作品として知られ、アレン・テート (Allen Tate) 氏は彼の「エミリー・ディキンソン論」の中で、この詩を「英詩のうちで最も完全な作品の一つである」⁽²³⁾ と評している。

ディキンソンの詩の中で〈死〉はしばしば擬人化して描かれるが、712番もその一つで、詩の冒頭、〈死〉は詩人である「私」‘I’の恋人のように、あたかも家の前に馬車を横づけて貴婦人をデートに誘う紳士のように登場し、死出の旅へと詩人を連れ出す。まず第1連を引用する。

Because I could not stop for Death –
He kindly stopped for me –
The Carriage held but just Ourselves –
And Immortality. ⁽²⁴⁾

私が死のために止まることができなかったので——
死が親切に私のために止まってくれた——
馬車が乗せていたのは私たち以外には——
不滅のみ。

第1連1・2行目、「私が死のために止まることができなかったので——／死が親切に私のために止まってくれた——」が表象する内容と共通すると考えられる一行が、1523番の詩にもみられる。1523番の冒頭の一行で詩人は次のように歌っている。

We never know we go when we are going – ⁽²⁵⁾

私たちは逝こうとしているときも私たちが逝くことを決して知らない——

彼女のいうとおり、〈死〉は人間 (mortals) のつねに背後にありながら、ふだんはその存在は意識の外に置かれ、生あるうちはそれが訪れる一瞬も決して知りようがない。けれど〈死〉は、人が意識しようとするまいと、絶対的に人のうえに「立ち止まる」。この言葉に、論者は徒然草第四一段の「我等が生死しやうじの到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」⁽²⁶⁾ の一節を想起する。俗世の名誉や利欲にこだわらない隠者・兼好法師の批判精神にも似て、人生への深い洞察を示すディキンソンの慧眼が窺える。

霊柩車の「馬車」に同行するのは、親切な紳士である「死」と、もう一人 ‘Immortality’ 「不滅」である。「私」と「死」と「不滅」、三者は急ぐことなく馬を走らせる。第3連は死出の旅であるこの遠乗りの車窓からの眺めである。第3連を引用する。

We passed the School, where Children strove

At Recess – in the Ring –

We passed the Fields of Gazing Grain –

We passed the Setting Sun – ⁽²⁷⁾

私たちは学校を通り過ぎた、そこでは子供たちが

休み時間に——輪になって奮闘している——

私たちは見つめている穀物の畑を通り過ぎた——

私たちは沈む太陽を通り過ぎた——

馬車の車窓をよぎるのは、子供たちが遊ぶ学校、稔りの畑、そして西へと向かう夕陽である。第3連3行目の ‘Gazing Grain’ 「見つめている穀物」は転喩（transferred epithet）であり、実際に見つめているのは ‘We’ 「私たち」のほうだと受けとれる。穀物が見つめているという擬人化した表現は、じっと佇むように黄金の穂が重く垂れている情景を描写すると同時に、語り手である ‘I’ 「私」には見えないはずのアングルから、自分たちの眼差しをも読者に伝える描写となっている。走馬燈のように過ぎるこれらの景色は、子供たち（‘Children’）が幼少時代と朝を、畑（‘Fields’）が壮年期と昼を、沈む太陽（‘Setting Sun’）が老年と夕方を象徴し、人間の一生と時間の流れを再現している⁽²⁸⁾ということについては、多くの批評家が論じているとおりなのでさらには語らない。論者はこのあとの動と静の対比に注目したい。

第3連と第4連の1行目まで、‘passed’ 「通り過ぎた」の動詞の連続が目立つ。また音の面でも、第3連の ‘We’ と ‘where’、‘School’ と ‘strove’、‘Recess’ と ‘Ring’、‘Gazing’ と ‘Grain’、‘Setting’ と ‘Sun’、第4連の ‘Dews’ と ‘drew’、‘Gossamer’ と ‘Gown’、‘Tippet’ と ‘Tulle’ といったように頭韻がそろい、効果的である。穏やかに進む馬車、流れるように過ぎる景色といった動的な場面が、音の演出によって滑らかに描き出される。第3連・第4連は動的なスタンザである。

その動的な流れは、第5連の冒頭、‘a House that seemed / A Swelling of the Ground –’⁽²⁹⁾ 「土の盛り上がり／のように見える家」すなわち墓の前でぴたりと止まる。第5連から最終連までは静の場面である。最後の第6連を引用する。

Since then – ’tis Centuries – and yet

Feels shorter than the Day
I first surmised the Horses' Heads
Were toward Eternity – ⁽³⁰⁾

あのときから——幾世紀——けれども
あの一日より短く感じる
私のはじめて馬の頭が
永遠に向かったのだと思った日よりも——

この動と静の対比が、第6連における時間の悠久と死の静寂をより際立たせているといえるだろう。第6連、詩人は墓中にあって、死出の旅に出た日のことを回想している。詩の最後、もっとも余韻を生じる箇所には‘Eternity’のキーワードがある。ここで、死出の旅が「永遠へ向かう」(‘toward Eternity’)旅であったことが明かされる。

彼女の肉体は第5連の「家」すなわち墓の中にあるが、その死した肉体とともに、彼女の意識は、幾世紀ものあいだ消滅することなく地中で生き続けている。この詩において、死者である詩人が天国に上げられることはない。

墓の中で死者である詩人は待ち続ける。彼女は何を待っているのか、それはやがてもたらされる〈永遠〉を待っているのだと考えられる。〈生〉の営みが行われる〈時〉の流れの外にあって、静かに彼女の目指す〈永遠〉の到来を待っている。彼女の旅はまだ終わっていない。

では最後に、この詩における〈死〉のイメージを考える。ここで重要となるのは、〈永遠〉とはディキンソンにとって何なのかということである。

まず、〈永遠〉であるということ、つまり‘eternity’の形容詞‘eternal’の定義をこの論文では次のように記す。

eternal: Infinite in future duration; that always will exist; everlasting, endless. (OED)

ここで論者は一つの考えを提示する。ディキンソンにとって、〈永遠〉であってほしいと願うのは彼女の詩であり、それを得る手段として彼女は〈死〉を捉えているのではないか、というものである。

448番・1212番・1472番などの詩からも窺えるように、ディキンソンは限りなく詩という芸術を愛し、言葉の芸術家である詩人の役割に誇りをもっている。また有名な‘I died for Beauty –’⁽³¹⁾「私は美のために死んだ——」の言葉で始まる449番の詩には、詩人であるディキンソンは「美(‘Beauty’)」の創造者であり、「美」と「真(‘Truth’)」は二つで一つであることが主張されている。たとえこの世で敗れようとも真実の「美」は永遠なるものであると、

詩人は語っているようである。

まことの芸術作品たる優れた詩の真価は、長い〈時〉の尺度を経て確かめられるものである。人間の〈生〉は束の間であり、無窮の〈時〉の大河の中のほんの一滴に過ぎない。幾世紀も生きられない人間は〈死〉の中で生きてこそ、〈永遠〉を確かめることができる。〈時〉に束縛された〈生〉が束の間であることを知る彼女は、逆に〈時〉の束縛から解かれた〈死〉の一助を得ることによって、自己の芸術、つまり詩が、〈永遠〉であることを確かめようとするのである。詩を作ることはすなわち、彼女にとって自己の芸術の永生を求める旅路、〈永遠〉への模索であったのだ。

V. 結 論

この論文の序論において、論者はディキンソンの詩における〈死〉には対比的な二種のイメージがあり、その一つとして、死んで棺桶や墓の中から外の世界や死者の意識を描くといったものがあると述べた。その代表的な例として、有名な280番と712番の詩をとりあげ考察を試みた。

以上見てきたように、280番の詩においては、〈死〉は意識の停止または沈降として描かれ、あるいはその先に何かがある可能性を含んでいた。死して埋葬された彼女の意識は天には昇らず、板を突き破るように下へと落ち、もぎとられるようにして途切れた。その下降は、棺桶の埋葬であると同時に意識の沈降でもあり、最終的に彼女の意識が向かった次の世界は、この詩の中では語られていない。280番の詩は、〈死〉による〈時〉からの脱却をほのめかして閉じられる。

そして712番においては、〈死〉は意識の継続として描かれ、ディキンソンは〈死〉を〈永遠〉へ向かう旅と捉えていた。死して埋葬された彼女の意識は、途切れることも沈降することもなく、長い年月、墓中で静かに存在し続ける。この詩の最終連で詩人は‘Centuries’「幾世紀」という〈時〉の長さを、自分が死んだ‘the Day’「あの一日」よりも短く感じている。それは〈死〉が彼女にとってそれほどに強烈な威力を持っていたというよりもむしろ、彼女が〈時〉を脱却したことを暗示している。なぜなら、この詩における擬人化された〈死〉は、しじゅう紳士的であり、彼女を決して急かせることはせず、強制ではなくごく自然に詩人を〈生〉から〈死〉の世界へとエスコートしてきたからである。このように、〈死〉はディキンソンにとって恐怖の対象ではありえない。

人間が生きている時間には限りがあり、〈時〉はいわば生者にとっての〈有限〉である。逆にいえば、〈無限〉は死者にこそ許されるものである。死者である彼女は、もう〈時〉に縛られることはない。〈生〉を手放し〈有限〉から解放され、〈死〉によって〈無限〉を手にするにより、人間は〈永遠〉に近づくことができる。しかし、それは〈死〉によって簡単に〈永遠〉がもたらされるというのではない。〈死〉は〈生〉の循環である〈時〉の流れを超越して、悠久を生き続ける一手段と

して存在するのである。かくして彼女は、つねに在り続けるものとしての〈永遠〉を目的地とする。ディキンソンにとって〈死〉は〈永遠〉へと向かう第一歩なのである。

〔注〕

- (1) Cf. 萱嶋八郎『米文学演習Ⅱa 学習の手引き』(佛教大学, 1999) p. 7.
- (2) Mordecai Marcus, *Cliffs notes™ Emily Dickinson: Selected Poems*. Gary Carey, M.A. (ed.), (New York: Hungry Minds, Inc., 1982 <<http://www.cliffsnotes.com>>) p. 74.
- (3) Robert L. Lair, *A Simplified Approach to Emily Dickinson*. (New York: Barron's Educational Series, Inc. Woodbury, 1971) p. 47.
- (4) Emily Dickinson, *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Thomas H. Johnson (ed.), (New York: Little, Brown and Company, 1960) p. 129.
- (5) Thomas H. Johnson, *Emily Dickinson: An Interpretive Biography*. (Cambridge, Massachusetts: Belknap Press of Harvard University Press, 1960) p. 212.
- (6) *The Complete Poems of Emily Dickinson*, p. 128.
- (7) Cf. 船木満洲夫「イギリスの評論」(船木満洲夫編著『英米文学概論』第6章)(佛教大学, 1996) p. 170.
- (8) *The Holy Bible: King James Version*. (Philadelphia: National Publishing Company, 1978) Ecclesiastes 12:5. 日本語訳は、日本聖書協会の口語訳聖書による。旧約聖書『コヘレトの言葉』
- (9) *The Complete Poems of Emily Dickinson*, p. 128.
- (10) *Loc. cit.*
- (11) *Ibid.*, pp. 128–129.
- (12) *Ibid.*, p. 129.
- (13) *Loc. cit.*
- (14) *The Holy Bible*, Genesis 2:7. 旧約聖書『創世記』
- (15) *A Simplified Approach to Emily Dickinson*, p. 47.
- (16) エミリー・ディキンソン(新倉俊一訳・編)『ディキンソン詩集』(思潮社, 1993) p. 153.
- (17) Emily Dickinson, *Emily Dickinson Selected Letters*. Thomas H. Johnson (ed.), (Cambridge, Massachusetts: Belknap Press of Harvard University Press, 1971) p. 172.
- (18) 新倉俊一『エミリー・ディキンソン不在の肖像』(大修館書店, 1989) p. 182.
- (19) *Emily Dickinson Selected Letters*, pp. 141, 159, et al.
- (20) Cf. エミリー・ディキンソン(中林孝雄訳)『エミリー・ディキンソン詩集』(松柏社, 1998) p. 254. *Emily Dickinson Selected Letters*, p. 140.
- (21) エミリー・ディキンソン(中島完訳)『エミリー・ディキンソン詩集——自然と愛と孤独と』(国文社, 1971) p. 206.
- (22) 酒本雅之『ことばと永遠——エミリー・ディキンソンの世界創造』(研究社, 1992) p. 120.
- (23) 新倉俊一『エミリー・ディキンソン：研究と詩抄』(篠崎書林, 1964) p. 96.

- Allen Tate, 'Emily Dickinson.' in Richard B. Sewall (ed.), *Emily Dickinson: A Collection of Critical Essays*. (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1963) p. 21.
- (24) *The Complete Poems of Emily Dickinson*, p. 350.
- (25) *Ibid.*, p. 638.
- (26) 吉田兼好（木藤才蔵校注）『徒然草』（新潮日本古典集成 新潮社, 1991） p. 61.
- (27) *The Complete Poems of Emily Dickinson*, p. 350.
- (28) 以下のような書物を参照。
- 萱嶋八郎『エミリー・ディキンソンの世界』（南雲堂, 1991） p. 51.
- 岩田典子『エミリー・ディキンソンEmily Dickinsonを読む』（思想社, 1997） pp. 146－147.
- Judith Farr, *The Passion of Emily Dickinson*. (London: Harvard University Press, 1992) p. 330.
- (29) *The Complete Poems of Emily Dickinson*, p. 350.
- (30) *Loc. cit.*
- (31) *Ibid.*, p. 216.

（うしろなか ようこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程）

（指導：川野 美智子 教授）

2004年10月15日受理